パソコン奮闘記

初めてパソコンに触れたのは七〇歳の時であった。特に関心を持ったわけではない。友人に勧められてたまたま入会した厚木のエッセイ教室では、毎月短いエッセイを書き、ワードでうって講師や、十五、六人の会員全員に配って批評しあうのである。やむを得なければ直筆でもいいのだが、読みやすいという点で、できるだけワードで、という会の趣旨で、ほとんどの人がパソコンで打ったものを提出していた。

当時私は社交ダンスにはまっていて、毎日のように踊っているという日々を過ごしていて趣味はダンスオンリーと言う状態だったので、ほかのことはあまり念頭になく、パソコンを習い始めるなんて思ってもみないことであった。しかしエッセイのサークルは活気があってなんとなく心が引かれるところがあった。　折よく、市の公民館で初心者向けのパソコン教室があるという情報を得て、出かけていった。生徒十四、五人（高齢者が多かった）に講師が一人、アシスタントが三人で、テキストにそって説明していき、理解できない点があればその場で遠慮なく手を挙げて

質問するようにということだった。初心者といっても、たいていの人は若干の心得のある人たちがほとんどで、私のように全く初めての人はいなかったと思う。理解できないところを放置すると後がますますわからなくなるので、手をあげっぱなし、とうとうアシスタントの一人が付きっ切りで教えてくれるという、はなはだ手のかかる生徒で申し訳ないことだったと恥じ入っている。

パソコンに興味を持ってほしいという趣旨だと思うのだが、講師は最後にトランプのゲームを教えてくれた。そこで私の「やる気」は俄然芽生えた。機械の操作はともかく、ゲームがすらすらと覚えられたのだ。講師がとても優しかったのと、ゲーム遊びにつられてノートパソコンを買った。やがてパソコンの操作を非常に安い料金で、ワンツーマンで自宅まで出張してきて教えてくれる先生に出会い、レッスンは順調な滑り出しをした。何より感動したのは、五〇年以上前に仕事で三年ほどやった英文タイプライターが思いがけなくも役立ち、両手の五本の指が、キーを見なくても無意識にパタパタと動き出したのだ。タイプライターとパソコンはキーの配列が同じである。指が五〇年の歳月をへてよみがえったのである。なんという奇跡、なんという歓喜。パソコン大好きがこの段階で生まれた。やがてメールが打て

るようになり、インターネットで様々な情報を持てるようになって、パソコンは私の大事な友達になっていく。若者が部屋に閉じこもってネットの世界にのめりこむのは寂しいが、七〇歳の老女では立派な知的行為であろう。当時の高揚した気持ちはエッセイ教室に提出した「パソコンが友達」に得意満面で書いている。

しかし、思わぬアクシデントに見舞われたのはパソコンを習い始めて半年ほどたったころのこと、パソコンが我が家から突然消えてなくなったのだ。社交ダンスのレッスンのため、その夜もいつものように六時半ごろに家を出て、帰宅したのが一〇時半ごろ。暗闇の中を手探りで部屋の電気をつけたとき、違和感があった。テーブルの上に置いてあるはずのパソコンがないのだ。一瞬ポカンとした。出がけにどこかに移動させたのか、いやパソコンはいつも大きな顔をしてテーブルの真ん中を占領していて不動の場所だったのだ。そのパソコンが、ない。慌てて庭に面した南側のガラス戸を調べた。時々そうであったように鍵をかけ忘れていたのだ。すぐに預金通帳や現金などを確認したが異常はない。パソコンが消えたことを除けば室内は全くいつもと変りなく、荒らされた様子はない。がこれは盗難ではないか。空き

巣が入ったということだろうか。深夜であったが緊急事態である。１１０番通報をした。二台のパトカーに四人の警官が物々しく乗り込んで来てくれて、犯人の侵入口から指紋が出ていないかと粉を吹きかけて調べたが無駄だった。パソコンがないということを除けばあとは全く手つかずの状態で、空き巣の手口を思わせるものは何一つなかった。不幸中の幸いと警官は言ったが、我が家にそんなに金目のものはないのかと犯人に侮辱されたような複雑な気分だった。

結局、私が最初に買った第一号の日立のノートパソコンは再び私の前に出てくることはなかった。どうしてパソコンだけを？という謎はいまだに解けていない。しかし裏口とはいえ、不用意に鍵もかけずに出かけるような自分の生活態度を大いに反省した。パソコンが身を挺して私の不用意をいさめてくれたのだと思っている。これもやはり当時エッセイに「わがパソコンへの惜別」という題で書いた。「半年ほどのお付き合いだったが、わがパソコンよ、新しい持ち主、ドロボーさんのところで活躍してほしい」と結んでいる。

そのころになるとパソコンはもう私の生活に密着していた。何人かの友人とメー

ルのやり取りをしていたし、何よりも日々、新しい分野を知ることが楽しくて仕方がなかった。それが突然消えたのである。個人的にお世話になっているパソコンの先生に新しいのが今すぐほしいと切々と訴えた。先生は日立のOBで、中古のパソコンをリニューアルして新しくソフトなどを入れて、中古パソコンとしてハードオフの店頭に並べるという仕事にもかかわっていて、ちょうどいい出物があるからどうか、ということで日立の中古のデスクトップを世話してくれた。はっきりした記憶はないがとても安かったように思う。

かくして二代目のパソコンが我が家にやってきた。ウインドウズXP、ワードは２０００。瀟洒な体裁ではなかったが、この中古パソコンをなんと八年間も使用することになる。この八年が私のパソコンの全盛期であった。

個人的にお世話になった先生は、とても残念で私もいまだに悲嘆に暮れているのだが、二年ほどのお付き合いの後、ガンで亡くなられた。やむを得ず、プロの教室はレッスン料が高価なので、方々の公民

館のパソコン教室に通った。パワーポイントやグラデーションを使って図形描画で絵を書くのが得意で当時の年賀状は我ながらびっくりするほどの出来映えである。エクセルなども一通り教えてもらった。ただ写真を取り込むのはやめた。整理下手なので、ファイルの中が雑然とするのを心配したのと、当時のパソコンの容量は大きくなかったから。「ひな形メール」という特殊なメールの方法も会得した。「カトレア」とか、「夢メール」などというひな形の製作者がネット上に動画を発表していて、自由に使ってもいい事になっていた。そこから取り出した動画をメールに添付し、音楽なども付け加えるとまことに優美なメールになる。ひな形メールの好きな友人とメールの交換をしては大いに楽しんだ。

　このようになるともうパソコンは玩具である。そうしてもう一つ重大なことは、ゲームが内蔵されていることだ。そもそも私がパソコンに熱中した最初の動機はトランプのゲームの遊びであり、特にはまり込んだのが「フリーセル」という遊びであった。ゲームというものは一種の賭け事と同じで麻雀と同じように、始めたら止まらなくなるという麻薬のような魅力がある。何気なく始めた「フリーセル」は、やりだしたらとどまることを知らず、あっという間に二，三時間が経ってしまうの

だ。いや、パソコンが「もっとやれ、もっとやれ」と挑戦してくると言ってもいい。だらだらと限りなく時間を費やしてゲームに没頭する。そのうち夜中の二時、三時までも遊ぶようになりほとほと自己嫌悪に落ちいった。思案を重ねた結果、ゲームのアイコンをゴミ箱に移し、さらにゴミ箱を空にした。画面からゲームの表示は消えた。もちろんハードデスクのどこかにもぐっているだろうが少なくても私の目の届くところからは完全に消えたしまった。自分の意志でやめることができなかった私はこのような方法でゲームを削除して解放されることができたのである。

二〇一三年三月、長年使っていた「ウインドウズＸＰ」のサポートが終了するので、あたらしい機種に買い替えるよう指示がでるようになった。セキュリティもきかないし、ウイルスが入ったら大変だから、買い替えるべきだと、私の周りの友人も買い替える人が多かった。パソコンは年々新機種がでてくる。売らんかなのメーカーの思惑もあるだろうが、私が古い形のパソコンに甘んじているうちに、ほとん

どの人が「ビスタ」を使っていた。やがて「セブン」になり、「エイト」が一般的になりつつあり、我われ高齢者の仲間は進歩した（と言われる）新しい機種に慣れるのに大変な努力を強いられるようになった。

八年使い古した私の中古パソコンはなんら異常なく、不自由はなかったが、三月末にサポートが終わるという脅し文句に惑わされて、それではとヤマダ電機に出向いて店員のお兄さんの勧めるままにＮＥＣの「セブン」を買った。当時すでに「エイト」が出始めていて、それが最先端であったが私の周りの友人たちは（ほとんど高齢者だったが）「エイト」はむずかしくて使いにくいとぼやいていたので、「セブン」にしたのである。二〇一三年、二月のことである

野暮ったいとはいえ、八年も使った「ウインドウズＸＰ」は、サポートが終わったという理由で、壊れているわけでも無いのに物置部屋にオクラいりとなる。代わってヤマダ電機で買って、接続、設定などすべてを店に依頼して新しく私のデスクの上に置かれた、真っ白で瀟洒なデザインのノートパソコン「セブン」。

それはＸＰとはかなりバージョンが違うので慣れるまでに苦労をすると友人からアドバイスを受けていたが、「エイト」と違ってデスクトップにそれほどの変化はな

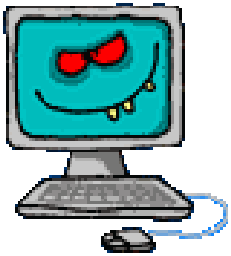
く、表示に若干の違いがあるくらいで、大きく変化しているところはなかった。使いこなすのにそんなに手間はかからなかった。プロバイダーも変えなかったのでほとんどそのままの状態で使うことができた。

しかし、セキュリティの問題で、「ひな形メール」は使えず、公民館で教えてもらったパワーポイント、図形描画など、楽しみで利用した芸術的分野はあきらめた。もっぱらエッセイを書くためのワードとメール、インターネットにしぼって使っていたので趣味としてのパソコンへの興味は薄れかけていた。漠然と機種を調べていたとき、また、トランプのゲームの存在が頭をもたげてきた。もちろん、「セブン」にもしっかり内蔵してあった。再び悪夢のようなゲームのとりこになる。さらなる魅力を持って「フリーセル」は出現したのだ

またもや、やり始めたらとどまるところを知らない「ゲーム」の世界に没頭することになる。もはやエッセイを書くどころではない。ゲーム漬けだ。

若者が「スマホ」で夢中になって遊んでいる心境が実によく理解できるのである。パソコンの前に座っては何時間も同じ遊びを繰り返した。エッセイを書くために買ったはずのパソコンがいまや完全にゲームに費やされている。自己制御できなくな

った私は、さすがにこれではいけないと、以前のようにパソコン上から削除することを思いついた。しかし「セブン」は「XP」のように簡単にはいかなかった。削除してゴミ箱に入れることができない。コントロールパネルからゲームを消そうとしたがそれも無理なのだ。何人かのパソコンの有能な友人に頼んで削除してもらおうと試したが、ゲームはハードデスクの中にしっかり内蔵されているので削除するのは無理だった。自分の意志でやめる以外にないと友人たちにさとされた。



自制力が弱くて、パソコンを開くと遊んでしまうという自己嫌悪になやまされ、何度も削除の方法を考えては右クリックで「削除」を打ち続けた。パソコンのせいで私はこんなに無駄な時間を使っている、壊れるならそれでもいいと、妙な恨みがましい気持ちになってガチャガチャと乱暴に扱った。そうして二年一〇か月経ち、私の白くて恰好のいい「セブン」のハードデスクは壊れてしまったのである。

昨年の一二月であった。電源を入れたらデスク一面に「ハードデスクがこわれたのでメーカーに連絡して修理するか取り替えるかするように」と表示が出たのであ

る。まだ三年もたっていないのにそんな筈はないと、キーをむやみにたたいたり、電源をいれたり切ったりしたが、無駄だった。たった三年で壊れるなんて？それはないでしょうと早速ＮＥＣの修理係に連絡する。いかにもマニュアル的な調子で話す電話口の男性は、三年で壊れることは珍しくないという。原因はさまざまで確定できないが、よくあることだとさえいう。この前の中古パソコンは八年も使ったではないか。外的な要因など思いつかないのに、ハードデスクがこわれるなんで想像もしなかった。「それで修理費はおいくら？」と尋ねる。ますますマニュアルな声で電話のお兄ちゃんは答えた。「ハードデスクの料金が五六〇〇〇円、出張して、接続、設定するのが二，三万です」とのこと。それでは修理するのに八万以上の料金が必要ということではないか。いま更ながら愕然とした。

昨年暮れから正月にかけてパソコンのことしか頭になかった。新しく買い替えるべきか、修理するべきか、早く決断しなくてはならない。友人たちに相談をした。答えはさまざまだった。使い慣れた機種だから修理したほうがいいという人もいれば、心臓だけ入れ替えても、ほかの臓器も三年たって傷んでいるわけだから買い替えたほうがいいという意見に分かれた。会社の仕事でパソコンを使用している東

京の娘に相談した。娘は買い替えるほうに賛成だった。最寄りの電気量販店にでかけて店員のお兄ちゃんに相談したら、老女の心細げな様子に同情して親切にいろいろ説明をしてくれて、富士通の「テン」を進めてくれた。金額も決して安くはなかったがこれが人生最後のパソコンになるだろうと、奮発して買うことに、ほとんど決めて帰ってきた。

ところが娘との電話でのやり取りを傍で聞いていたらしい孫が「待った」をかけた。彼女は大学四年生で卒業制作も合格、就職も決まり、目下ルンルン気分でアルバイトなどをしている。その二二歳の孫が電話をかけてきて、「私が一緒に行ってパソコンを選んで、設定もやってあげる」という。半信半疑であまり信用できないなーと思っていたら二，三日ほどしてやってきた。最寄りの駅で待ち合わせ、タクシーで電気メーカーの量販店へ。彼女は電気店の広告のチラシを持参し、迷うことなく店員に指定した。私の意見は完全に無視した。

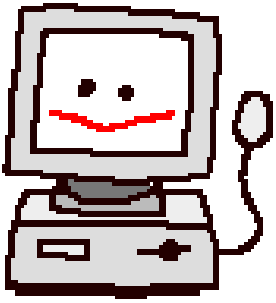
その場で買って持ち帰ったパソコンは「レノボ　テン」。装丁は黒色。聞いたこともないメーカーで不審は募る。「大丈夫、安心してよ。おばあちゃんはメールとネットとワードだけ使うんでしょう。余分なものが入っていても使わなければ意味がな

いし、それだけのソフトがあれば十分だと思うよ。私が繋いで設定してあげる」と自信満々である。おろおろしている私をしり目に彼女は中身を確認し、二時間ほどで設定し終わった。無事に完成したのだ。

プロでもそれだけの時間がかかるのに、まるで手慣れたように設定した芸術学部の女子学生の孫にあっけにとられてしまった。これが最近の若者であろうか。彼らにとってパソコンの扱いは、手慣れた玩具のようなものなのか。富士通のパソコンの半額に近い、数万円の「レノボ」に設定料金は無料。予算より随分と安上がりになった。彼女はファミレスのステーキとパフェのデザートを平らげて満足げに帰っていった。「なんでも困ったことがあったら相談してね」と念押しをして。

今、私はパソコンの前に座っている。もうゲームはやらない。たまにソリティアという遊びをやるが以前のように熱が入らない。第一番目のパソコンは、私の不用心をいさめるかのように盗難にあって失ってしまった。「セブン」は私のゲーム狂いにストップをかけるために、自壊した。

「レノボ」を大事にしていこうと思う。台湾製だというが、孫が選んでくれて設

定をし、すべてを整えてくれたパソコンだ。彼女の想いの詰まったパソコンにとても愛着している。デスクトップに私の大好きなスペインの白い街並みの風景を撮り入れてくれた。そうだ、初心にかえってまた新しい分野に挑戦しよう。

二〇一六年二月